
二人の英雄物語

ゼンラーマンZ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人の英雄物語

【Nコード】

N7808Z

【作者名】

ゼンラーマンZ

【あらすじ】

このお話は主人公と異世界から来た少女が、普通の生活を送りながら共に魔物と戦う。

という流れで書くこうと思いますが、初めて自分以外の方々に自作の小説を読んでもいただくとあって、ちゃんと最初の設定通り話を進められるか自信がありません。

稚拙な文章かもしれませんが、温かい目で見守っていただけましたら幸いです。

日常

この背に翼があれば、この空を自由に飛ぶことができるだろう。
なのに何故、人はこんなにも不自由な地上で互いにいがみ合いながら生きてるのだろう。

見上げれば何処までも広がる自由な空間があるのに
何故人には翼がない？

流れ行く雲を飽きもせず見ながら考え事…というよりたそがれてると

『。』

何処からか女の声が聞こえた気がして部屋の中を見回した。

たいして広くないアパートの中の一室に、自分が今寝そべってるベツトと勉強机、少し大きめの本棚、あとはおしゃれに全く関心のない男子高校生には少々大きすぎるタンスくらいしかない純和室。まあ狭い家だからこんだけあれば殆ど動き回れるスペースは残らないのだが。

改めて見回すまでもなく、部屋の中には自分以外に人はいない。他にもこのこと同じ広さの部屋が三つあるが、そのどこにも気配はない。空耳だろうか？それにしてもはやくにはつきり聞こえた気がする。

「ま、どうでもいいか。」

そう言つて再び空を見上げた。

変わり映えのしない毎日。

ただ学校と家の間を往復するだけの日常。

まあこんな生活を十年もやってたらさすがに慣れた。今じゃ何も感じない。本当に、何もだ。小さい時は興味の対象は尽きることなく、世界がとても面白いもので溢れているんだと信じていた。

だがいつからだろう…なんだか何を見ても、何をやっても感動したり興奮したりしなくなったのは…

考えてみると最後に思いつ切り笑ったのていつだったけ？

そう首を傾げてしまうくらい昔な気がする。

まあそれこそどうでもいい事か。

取り留めのない思考を放棄して、現実には注意を向ける。

「おい！こつちにボール寄越せ！」

「バー力。下手な奴は引っ込んでろ！」

「うわ…ちよつと傷付いた…」

まずそんな会話が耳に入り、次いで何とも楽しそうにクラスメイトがサッカーをしている姿が目に入った。

そんな中俺はゴールネットに背中を預け、目の前で繰り広げられる熱戦を傍観している。

一応授業中ではあるのだが、正直言ってあんな風に和気あいあいとした雰囲気は苦手だ。

体育教師が見てないのをいいことにこうやってサボらせてもらっている。

「だいたい授業開始と同時にいなくなる教師ってどうよ？…なあ桐生？」

「ん？ああそうだなー。」

隣でやる気ゼロのキーパーを演じてるクラスメイトが話し掛けてきたので適当に相づちを打っておく。授業始まってまだ10分も経ってないし。

何もせずにこうやってばーっとしてるのも暇すぎるしな。

『何を求める。』

「!？」

急に俺の耳元で凜とした女の声がしたのに驚いて、慌てて背後を振りかえる。

「……誰もいない……」

「ん？どうかしたか、桐生。」俺の様子を訝しみ、隣で眠そうに突っ立っていたあのやる気ゼロのキーパーが不思議そうな目でこっちを見て言った。

「……いや。何でもない。」

俺は平静を装い、またゴールネットにもたれかかった。

なんだか前もこんな事があった気がする。そんな事を考えながらぼーっと目の前の光景を眺めた。

11月の秋空の下、楽しそうにボールを追っかけている彼等の姿がいつもより遠く感じた。

「あー…暇だなー。」

一人で坂道をとぼとぼと下りながら思わず漏らした。周りには誰もいない為気にする必要はない。

今日は体育の時間に妙な声が聞こえた以外は、いつもと変わらずに1日が過ぎ去った。

「しかし何でこんなに気になるんだ？」

あの時間こえた声は何故か頭から離れないのだ。そのせいでその後の授業は上の空。普段滅多にない事だが何度も先生に注意された。

「ま、キレイな声だったけどさ…それだけじゃないよなあ。」

何故こんなに気になるのか分からないが今も意識の大半をあの声に占められてる。

やばい。自分の頭が心配になってきた。

精神衛生上の問題がありそうな気がしてきたので、何か気を紛らわせる物はないかと辺りを見回すが、殆ど毎日同じ道を通ってるせい

で全く新鮮味がない。

都会でも田舎でもない街の外れにある道路を歩く俺。目に入る物と言ったら木、草花、民家、車等。だが不思議な事に目の届く範囲内に自分以外の人影はない。

「そっぴや本当に誰もいないな。というか車すら通らなくなつてきてるんですが。」

市街地から外れているとはいえこのあたりはそれなりに交通量が多いのだが、今では一台も見かけなくなった。

人の気配が完全に失せ、不気味な静寂がこの一帯を支配する。

おかしい。授業が終わつてすぐ家路についたため現在時刻はせいぜい四時半ぐらいだろう。あと10分も歩けば家に着く。なのにこんなに静かなのは明らかに異常だ。田舎の山中でももう少し賑やかだろう。なのに俺の足音以外全く聞こえない。

さすがに少し不安になつて足を止め、何か聞こえないかと耳をすましていると、急に後ろから声がした。

『此処には私とお前の二人しかいない。探したところで何も見つかりはしないぞ。』

聞き覚えのある凜とした女の声。

恐る恐る振り返ると、そこにはファンタジー系のゲームに出てくる魔術師が着るような黒い裾長のローブに身を包んだ女がこっちを向いて立っていた。

「はじめまして、魔法使いのお嬢さん。」

見たところ俺とそんなに歳が離れてるとは思えなかったので、気安く話し掛けてみた。パツと見ただけでそうと分かる程の美少女だしな。俺に何か用があつて話し掛けてきたのなら、少しでも話しやすい空気にしたかったのだ。実は女子が少し苦手なんだよね。

だが少女はその整った顔を不快そうに歪めた。
あれ？なんかまずつた？

「…私を馬鹿にしているのか？もしそうなら貴様をこの場で塵も残さず消滅させるぞ」

どうやら先の俺の発言は彼女の的には死亡フラグだったらしい。

「いや、そんなつもりはなかったんだ。気に障ったのなら謝るよ。」
そうやって釈明すると、幾分表情を和らげてくれた。

しかし…改めて見ると本当にキレイだ。外国の子なのだろうか、銀色の髪は腰のあたりまで伸びていて、毛先まで手入れが行き届いているようだ。目鼻立ちがすっきりしていて、体もローブを着ているので詳しくは分からないがスレンダーな体型のようで、多分こんなにキレイな子に会ったのは生まれて初めてだろう。

こんな子が俺なんかは何の用だろうか？

俺は自慢ではないが存在自体が平凡だ。勉強もスポーツも容姿も全て平均点レベル。特技もこれといってないが、かといって苦手な事も特にない。やれと言われれば大抵の事はできる。

そんな俺と彼女のような美少女との間に接点があるとは思えないのだが…

俺がこの状況を不思議がっていると彼女からその答えはもたらされた。

「まあいい。お前は私にえられたのだ。この世界を守るための防人として」

「えっと…防人？^{さきもり}世界を守る？」

「そうだ。私と共にこの世界を《アーク》の魔物共から守って欲しい」

曰く自分達の世界では最近、魔物の大量発生が起きて国の殆どを滅ぼされた。残った人類は魔物から隠れて細々と生きている状態だ。このままでは遠からず人は一人残さず滅ぼされるだろう。

そこまで聞いて俺は話の腰を折らせてもらった。どうしても言いにくいことがあるのだ。

「君達が住んでいる世界の名はアークで間違いないんだよね？」

「そうだが？」

「そして魔物が湧いてきたのもアークだよな？」

「…そうだな。」

俺は笑顔で彼女を問い詰める。

「それじゃあその問題は君達が自分で解決するべきじゃないかな？
というかさつき君は魔物がさもこの世界まで侵略してくるような事
言っただけどうしてそんな事分かるの？そして最初の話と後から
聞いた話ではなしが微妙に違う気がするの俺だけ？最後にもう一
つ、そんな話をどうやって信じるの？」

言っておくが俺は別に彼女を責めているわけではない。

ただ面倒事はごめんだと思ったから話の優先権を無理やりでも奪つ
て、一刻も早く平穏な日常生活に回帰したかったのだ。

正直いくら美少女でも延々電波な話に付き合うのも馬鹿らしい。

「ふむ…やはり信じておらんようだ。ならばまずは証拠を見せよ
う。」

何やら思案顔だったのが次の瞬間にはまばゆい笑顔に変わってそう
言った。

グツとくるものがあつたのは否定しないが、なにがそんなに楽しい
のだろう？

「正直これであっさり信じられたらどうしようかと思っていたのだ。
私の主になるのなら、その様な体たらくではこの先不安だからな」

「はあ…さいですか…」

もうついていきません。何故見ず知らずの人間に試されなければな
らないのか。これはもしかして何処かの研究所の心理実験か？

だったらさっさとネタバレして欲しいのだが、ここで帰ってこの子
を困らせるのも申し訳ない気がする。仕方ない。もう少しだけ付き
合ってやろう。

我ながらどうかしてると思ったが、不思議と嫌な気分ではない。そ
んな事を考えていると、不意に見当違いの方向から少女の声がした。

「おい。そんな所に突っ立つてると殺されるぞ」

「は？何に？」

「どうせ言っても信じまい？いいからこっちに来い」

いつの間にか近くのブロック塀に身を寄せていた少女が、こっちに向かって手招きしている。

今度は隠れんぼか？

そう思ったがとりあえず少女に倣って塀に身を寄せた。とはいっても、鬼のいない隠れんぼなんかしても面白くない。暇つぶしに喋つとくか。

「そういえば自己紹介してなかったな。俺は桐生耕平。君は？」

「フランチェスカ。フランでいい。」

「それじゃ俺も耕平で」

そのまま雑談を続けようと口を開くが、それはフランに制止された。
「…来るぞ」

次の瞬間、何かの足音がこっちに向かって近づいてきていることに気がついた。もしかしてこの足音の主から隠れているのだろうか？
ただと明らかにこの足音は四足歩行の動物のものだ。

「犬が飼い主から逃げてきたのか？」

「そんな可愛いものじゃない。見てみる」

促されるままに塀から顔を出して、通りの向こうをうかがった俺は愕然とした。

「何だあれは……」

戦いの始まり

60メートル程先の道にそれはいた。

確かに形は犬のそれだが、大きさが尋常じゃない。四つ足で立つて
る状態で俺と同じくらいの位置に頭がある。

そしてその頭だが…見間違いでなければ二つある。

そんな化物が時折頭を振ったりしながら、鼻息荒くのっし、のっし
と歩いているのだ。

「これで信じたろう。さ、命が惜しくば私に協力しろ。」

「ああ分かった。」

「…何だと？」

「協力しなきゃこの場で死ぬだろうしな。せめて年取って遊び尽
くしたと、思えるまでは生きていたいとか考えてるんだけど？」

「……………」

フランは俺の顔を見て固まっている。こうもあっさり協力を得られ
るとは思ってなかったのだろう。

鼓動が早まり、頭の芯がずっと冷たくなる。今やるべき事を淡々と
こなそうとする俺。

ああ…俺って感性が鈍いのかな…。

小学生の頃、級友がふざけて振り回していたカッターナイフが、そ
の手を離れて俺に向かって飛んできたことがあった。

俺はその時なんの躊躇もなく左手で受け止めた。掌がざっくりと切
れたが、特に何も感じなかった。教室中が大騒ぎになったが、俺だ
けは冷めた目で傷口を抑えていた。

中学の頃、階段を降りていると後ろから誰かに突き飛ばされた。

俺は逆に自ら飛んで踊場に無事着地した。振り返ると俺は呆然てし
ているそいつ等に向かって、半ば無意識の内に殴りかかった。

俺はどうやら自分を襲う危険から自動で身を守ろうとするらしい。

これが人間の本能なのか、個人に備わった才能なのかは分からない

が、今回のこれも間違いなく自身を救う。

「…いいのか？」

「もちろんだ」

だから恐る恐る聞いてきたフランに即答した。

「分かった。ならば目を閉じてじっとしている。」

言われた通りに目をつぶると、胸にフランの手がそつと触れた。それを認識した瞬間、手が触れているあたりを起点に激痛が全身に広がる。

「……ッ!!」

だがその痛みも一瞬で治まり、閉じていた目を開いた。

「お前っ！大丈夫なのか!？」

「もう平気だ。それよりこれからどうする？」

何故か驚いた様子のフランに平然と返す俺。その間に体の調子を確かめる。

特に変わったところはないようだ…いや。何かが血液と共に全身を駆け巡っている感じがする。これは何だ？

「驚いたな…。魔法回路同士を繋ぐと激甚な拒否反応が起こるのだ
が…」

「魔法？」

「そうだ。これでお前も魔法が使えるようになったが、今は無理だろう。ここで大人しくしている。」

そう言うとフランはさっさとあの化物の元に行ってしまった。

俺の体を気遣ってくれたのだろうか。よく分からないが、確かに俺ではあの化物に対してなんの役にも立たない。大人しくしよう。

塀から顔を出してみると、意外なほど近くに化物はいた。もうここからの距離は20メートルもないだろう。今では恐ろしげな唸り声まではつきり聞こえる。

そんな化物とフランの距離は10メートルもない。二者共それ以上近づかず、お互いに隙を窺ってる様子だ。

じりじりと化物がフランにじり寄るが、フランは微動だにしない。

あと5メートルといった所で化物は姿勢をいつそう低くして飛びかかる準備をした。フランはやはり動かない。

そのまま数瞬の時が過ぎ去り　　。

化物が動いた。鋭い爪が霞む程の速度で振るわれる。対してフランは右掌を前方に向けたのみ。だがその直後、二者の間の空間に光り輝く青い幾何学模様が浮かび上がった。

幾何学模様が一際眩く輝いたと思ったら、雷が近所に落ちた時の様な轟音と共に化物の巨体が吹き飛ばされ、しばらく痙攣していたが、やがてぴくりとも動かなくなった。

覚悟

「それじゃあ話の続きを聞かせて貰おうか。」

あの化物をフランが討ち取った後、俺はそのままフランを伴って帰宅した。聞きたいことが山ほどあるのだ。

あの現実が存在するはずのない化物のこと、

フランが接触してきた目的、

そして、俺の体の変調。

俺は厄介事に首を突っ込んでしまった。いや、巻き込まれたか。どちらにしてももう無関係ではられない。

ならば全てを知る必要がある。他の誰でもない、俺自身の命のために。

「ああいいだろう。…いや、その前にだな……」

「？」

なにやら言いにくそうに語尾を濁し、視線があっちこっちさ迷い泳いでいる。

が、やがて覚悟を決めたのか俺の目を真っ直ぐに見つめながら、

真摯な態度で口を開いた。

「すまない。私は君に協力してもらう為に、あの魔物が現れることを知っていたながら、敢えてあの時、あの場所で君に接触した。」

「……………」

「そうでもしなければ話を信じてもらえないと思ったのだ…だが一般人である君を危険な状況に引きずり込んだのは事実だ。どんな誹りも甘んじて受けよう。」

「……………」

「だが本当にこの世界も私達のいるアークも危険な状況なのだ。このままではまた人が沢山死ぬ。…そんなの…私は嫌だ…」

「……………」

「だから改めてお願いする。私と一緒に戦って欲しい。この通りだ、

頼む。」

そう言つて深々と頭を下げられた。

俺はその様子を黙つて見つめながら淡々と言つた。

「…とりあえず諸々の事情を聞かせてくれないか。分からない事が多すぎる今は、なんとも言えない。」

「…それもそうだな。」

顔を上げたフランはどこか悲しそうな表情をしていた。

それから俺は先程聞いた話をもう一度おさらいした。

「つまりフラン達のいる世界で近年、さっきの犬^{アーク}つころみたいな魔物が大量発生して、人類存亡のピンチと。」

「そうだ。」

「それでこつちの世界の人間に助けを求めにフランのような、腕利きを何人がこつちに送り込んだ。」

帰宅途中に聞いた話によるとフランは魔法のエキスパートらしい。彼女は自分より腕のいい魔法師はもう、あちらにも数名いればいい方だと言っていた。

「それでだいたい合つてる。正確にはアークとこちらの世界の人間との間に利害関係が生じたために、魔物との共闘が叶えばと思つて派遣されたのだから。」ここで俺はある単語に反応した。

「利害関係？」

「そうだ。君も見ただろう。魔物がこちらの世界の至る所に出没している。これは魔物の大量発生を引き起こした張本人の仕業だと思われる。それ故私達はこの世界の人間に接触し、あわよくばその者を止めてもらおうと考えたわけだ。」

「確かに俺達にとつても一大事だけど…アークの方でどうにかできなかつたのか？」

俺個人の正直な感想としてはそんな厄介事に異世界の人間を巻き込むな！

と、言いたいところだ。

「言っただろう。私達の世界では人間は殆ど淘汰されたて、生き残った人間は非常に僅かだ。とてもじゃないが魔物共と戦う余力など残っていない。」

「そんなに酷いのか…まあいい。それじゃあ俺はその魔王みたいな奴と交渉、もしくは力づくで止めればいいんだな？」

「そうなるな。勿論私も助力は惜しまない。共に戦ってくれ。耕平」真剣な眼差しで見つめてくるフランに俺は呆れた。

「俺の命は君が握ってるようなものだろう？ならそんな風をお願いする必要はない。役に立たなかったからといって殺されても文句を言えないんだから。戦うよ。」

「君はっ！！」

突然立ち上がったフランに俺は胸倉を掴まれ、勢い余ってベツトに押し倒された。その顔は怒っているのに泣いてしまいそうで、なんだか悲しい気持ちにさせられた。

「どうして君は自分のことにそう無関心でいられるんだ！

思えば最初からそうだった。私が協力を迫った時何の躊躇いもなく私の言うことに従った。自分の命なんてどうでもいいと言わんばかりに！

君は自分の命をなんだと思っている！

私達は死にたくないと言いながら死んでいった者達を…沢山…見捨てて…くっ…」

そう言っただけ泣き出してしまった。俺は自分の迂闊さを呪った。

フランが何を言おうとしたのかは臆気ながら想像がつく。おそらく魔物に殺されていく人達を救えなかった自分自身を責める言葉だろう。

今まで気丈に振る舞っていたのは、やもすれば折れてしまいそうな心を支えるためだったのかもしれない。

もっとも、そんなものはただの感傷でしかない。自分が生きる為に見捨てたのなら、泣いたところでどうにもならない。その事実を受け止めて心の中で割り切るしかないのだ。その点彼女はひどく

脆いのもしれない。

俺はいまだに泣き続けるフ란の頭をそっと抱きしめた。
しばし躊躇う様に身を固くしていたが、やがて胸に顔をうずめて再び泣き出したフ란に囁きかける。

「…すまない。一緒に戦うよ。これ以上誰も傷つかなくてすむように…俺達が終わらせよう」

きつともう安全で平穏な日常に戻ることは叶わないだろう。だがそれでも構わない。

俺は生きる。どんなに危険でも自分の命運を他人任せにする気はさらさらない。死んでしまったのは自分の責任。そういつて死ぬのなら納得できる。

「……うん……」

だから今この娘に逃げられて戦う術を失うわけにはいかない。自分を否定するような言動は控えるべきだろう。

俺はフ란が落ち着くまでそのまま胸を貸していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7808z/>

二人の英雄物語

2011年12月27日22時55分発行